平成24年 3 月30日

郷土あきる野　第23号

発行　あきる野市教育委員会　東京都あきる野市二宮350　電話 042-558-1111　FAX 042-558-1560

二宮神社境内の地宝（ちほう）

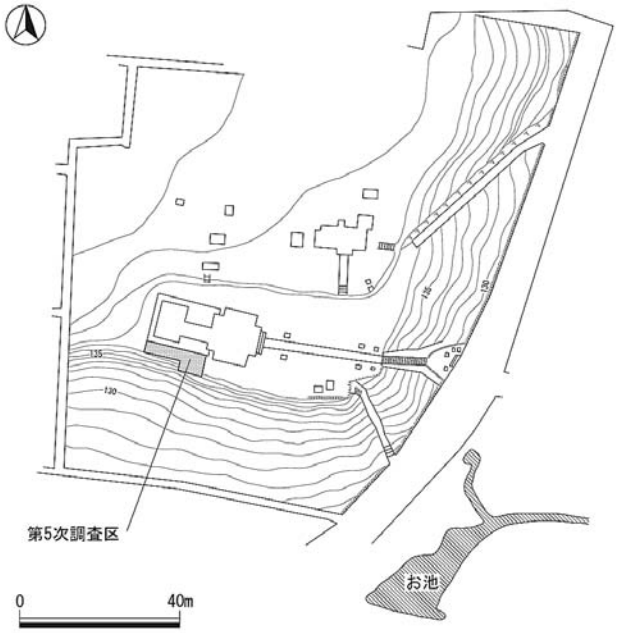
小野本　敦（日本考古学協会会員）

はじめに

あきる野市二宮に所在する二宮神社（写真１）は、武蔵国六所宮の一つに数えられる中世以来の古社として有名です。しかし、実はこの場所が、古代にも信仰の場となっていたことをご存じの方は少ないのではないでしょうか。

発掘調査と出土遺物

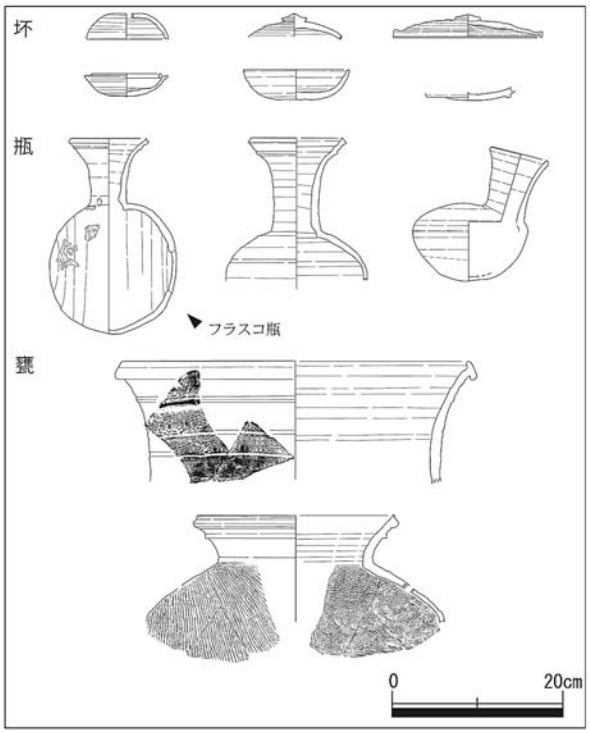
二宮神社は、平井川と秋川にはさまれた市域東半部の台地（秋留原面）の東端に鎮座し、境内の南東斜面下から発する湧水が、「お池」と呼ばれる水場を形成しています（写真２）。こうした恵まれた自然環境のもと、境内周辺は旧石器時代から人々の生活の場として利用されてきたことが、数度の発掘調査によって明らかになっています。今回ご紹介する古代の遺物が出土したのは、本殿脇の南側を発掘し



図面１　二宮神社境内と発掘調査区

写真１　二宮神社社殿

写真２　お池

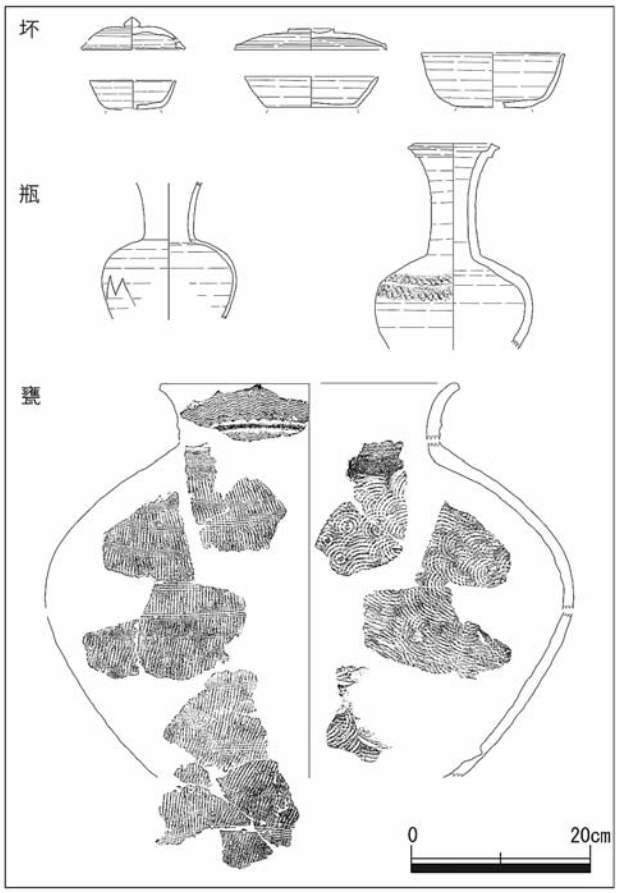


図面２　東海地方の須恵器

写真３　東海地方の須恵器

た1970年の第５次調査のことです（図面１）。遺物は土器の破片が中心で、約3,000点が出土しました。これらは以下のように分類できます。

東海地方の須恵器（図面２、写真３）須恵器とは窯を用いて灰色に硬く焼き上げた土器のことを言います。東海地方の製品は、器面が白っぽくなめらかで洗練されたつくりで、エメラルドグリーンの美しい自然釉が器面にかかることが特徴です。出土した破片の６割強を占めています。静岡県湖西市にある湖西窯跡群の製品が多く確認できます。土器の種類には、液体を貯蔵する甕や瓶、個人用食器である坏などがあります。中でも丸い胴部にラッパ形の注ぎ



図面３　北武蔵の須恵器

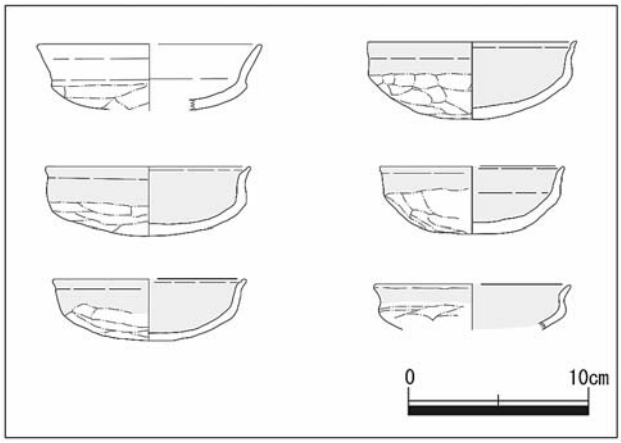
口が付くフラスコ瓶（理科の実験でおなじみのフラスコに形が似ていることからこう呼びます）は、東海地方でしか生産されていない珍しい焼物です。

北武蔵の須恵器（図面３）　東海産に比べて黒っぽくザラザラとした質感で、やや繊細さに欠ける印象を受けるのは、北武蔵（今の埼玉県域）で作られた須恵器です。出土した破片の約３割に相当します。やはり甕、瓶、坏の３種類があります。南比企窯跡群（鳩山町）や末野窯跡群（寄居町）の製品が多く見られます。

土師器（図面４）　量的には全体の１割未満ですが、窯を用いずに焼き上げた土師器と呼ばれる土器も出土しています。土師器はもともと赤褐色のうつわですが、さらに赤く塗って仕上げているものが多く見られます。境内から出土した土師器はなぜか坏ばかりです。その理由は後で考えてみましょう。

出土遺物からみた古代の二宮神社境内

境内の土地利用　出土した土器を年代順に並べてみると、大まかにみて土師器は７世紀前半から７世紀



図面４　土師器の杯

後半まで、東海地方の須恵器は７世紀前半から８世紀初頭まで、北武蔵の須恵器は７世紀末から８世紀前半までのものがあります。境内に土器を持ちこむ行為は、少しずつ供給源を変えながら、およそ一世紀にわたって続いたわけです。この間の境内の土地利用の形態としては、Ａ：古墳が存在し、土器はそのお供えとして持ち込まれた、Ｂ：境内でマツリが行われた、などが考えられます。湖西窯産の須恵器は古墳に供えられることもよくあるので、Ａの可能性も否定はできませんが、出土した土器はとても多く、しかも発掘区は境内のごく一部ですから、Ａとすれば相当な数の古墳が境内に存在したことになってしまいます。また、８世紀は全国的にも古墳の築造は少なくなってくる時期ですので、Ｂと考える方がよいでしょう。境内の眼下からは「お池」をはじめとする幾筋もの湧水が流れ、その先には生産地域である前田耕地遺跡が広がっています。こうしたロケーションから、農作物の豊穣を願うマツリが行われたと考えておきたいと思います。

７世紀のマツリ　７世紀代の須恵器は東海地方からはるばる運ばれてきたわけですが、土師器のほうはあきる野市周辺の竪穴住居の発掘でもよく出土するものです。これらの来歴を異にする土器が境内からともに出土する状況を私は、境内で行われたマツリに周辺村落の住民が各々の食器（土師器の坏）を持って参加した様子を示すものと考えています。境内での土地利用とほぼ同時代の文献史料である『常陸国風土記』に、ムラの神社の泉に住民が集っているという記事や、マツリで催される酒宴に遠方から人々が参加したという記事などが見られるからです。眼下に「お池」を望む境内で、珍しい須恵器（中には酒が注がれたのでしょう）を囲んで談笑する人々の姿が想像されます。

図面５　湖西窯産須恵器の流通
（後藤健一氏④文献に加筆）

湖西窯をはじめとする東海産須恵器は、７世紀から８世紀にかけて、東日本の太平洋沿岸を中心に活発に流通することがわかっています（図面５）。その多くは古墳や拠点的な集落遺跡、または祭祀遺跡から出土するもので、今で言うブランド品であったと考えられています。境内の東海産須恵器も、こうした東日本全体の動向の中で理解することができます。

ところで、境内でマツリが行われた７世紀前半からの一世紀とは、日本列島に初めての中央集権的国家＝律令国家が誕生する時期にあたります。おりしも、境内から多摩川を15kmほど下った現在の府中市域では、中央から派遣された役人が政治を行う場である武蔵国府の建設準備が始められる頃でした。こうした時代背景を踏まえると、東海産須恵器の流通には、単なる地域間の交流というレベル以上の意味があったと考えた方がよさそうです。つまり、マツリによって人々のエネルギーを結集して農作業へ向かわせることで、地域の生産基盤を安定させようとしたのではないでしょうか。現在のマツリは宗教的または娯楽的な意味合いが強いですが、かつては政治をマツリゴトと言ったように、政治と宗教は深く結びつい

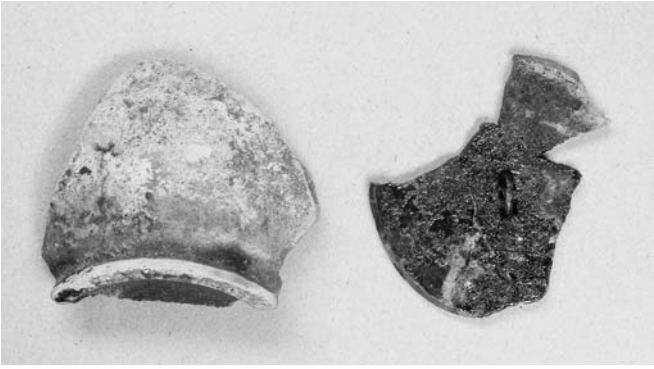
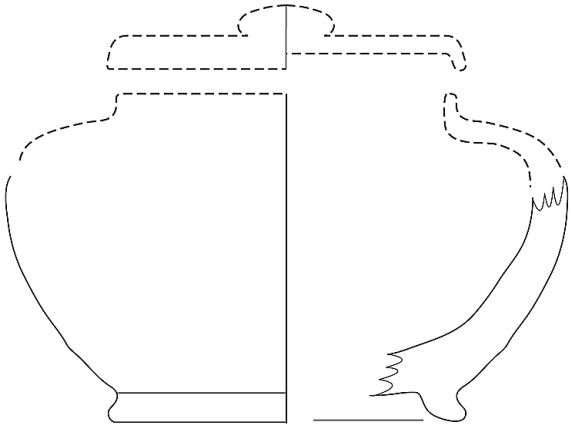


写真４　奈良三彩小壺破片（左）、青銅鏡（右）



図面６　奈良三彩小壺推定復元図（原寸）

ていたのでした。なお、境内の周辺（小川郷）には平安時代に馬を飼育する牧（小川牧）が設置されたことが知られていますが、近年の発掘調査成果によれば、馬の飼育の開始は平安時代より遡る可能性が出てきています。当時の馬は軍事的に重要な意味を持っていましたから、秋留台地周辺の人々の一部が馬飼を生業としていたことも、境内にマツリの場が設定された一つの要因かもしれません。

８世紀のマツリ　８世紀には土師器がなくなり、考古学的にはマツリへの民衆の参加が確認できなくなります。この頃、東海産須恵器の供給量が少なくなるのは全国的な傾向ではありますが、在地の側からみれば、近隣の窯場から須恵器をまかなえる体制が確立したこと、すなわち、「武蔵国」というまとまりがおぼろげながら出来上がってきたことにもよるのでしょう。しかし、この時期の遺物として、平城京の周辺で生産された高級な焼物である奈良三彩の小壺や、青銅製の小型鏡などが出土しており（写真４・図面６）、依然として律令国家と深い結びつきを持っていたことが窺われます。

マツリの終焉　境内のマツリに関わる須恵器で最も新しいものは、武蔵国分寺（東京都国分寺市）の周辺で見つかる最も古い須恵器よりもわずかに古い様相を示しています。国分寺の創建という、まさに律令国家による地域支配が軌道に乗ってきた時期に、二宮神社境内のマツリは終焉を迎えたのです。

一方、境内からは現在の二宮神社に直接関連する瓦などの遺物も出土していますが、今のところ12世紀を遡るものは確認されていません。つまり、ここに紹介した古代のマツリの場が、二宮神社に直接繋がっていくわけではないのです。二宮神社境内は、武蔵国の成立という歴史の一コマに重要な役割を果たした後、ふたたびもとの静かな森へとかえっていったのでした。

おわりに

今回紹介した資料は境内のごく一部から出土したものですから、発掘調査が進めば、ここまで述べてきたような見解も修正する必要が出てくるかもしれません。しかしそれでも、二宮神社境内があきる野市だけでなく、古代の南武蔵を考える上で非常に重要な場であることは間違いありません。今後の調査の進展を楽しみに待ちたいと思います。

【参考文献】

①秋川市教育委員会　1975　『秋川市二宮神社境内周辺の遺跡』
②あきる野市教育委員会　2004　『武州二宮神社と古代・中世の瓦』
③あきる野市教育委員会　2011　『あきる野の須恵器―二宮・小宮地域の古代―』
④後藤建一　2010　「湖西窯産須恵器の流通」『古代窯業の基礎研究』窯跡研究会